

報 告

特別な配慮を必要とする実習生に関する研究動向

Research trends on apprentices requiring special consideration

服部 伸一^{*1}・井上 寿美^{*2}・半田 結^{*3}・廣 陽子^{*1}

要約：近年、看護・福祉などの対人援助職の養成において、合理的配慮を要するレベルには至らないが、発達障害に似通った特質がみられ、対人関係において課題のある学生に対する指導の困難さが指摘されるようになってきた。本研究では、対人援助職における先行事例を中心として、特別な配慮を必要とする実習生の困難感や支援に関する文献の検討を行い、問題点の整理を行った。

先行研究の分析からは、対象となる学生のアセスメントと配慮申請のシステムづくり、学生相談室との連携による心理的支援、入学前から卒業後までを見通した総合的かつ継続的な支援のあり方が課題となっていた。実習においては、実習先担当者と実習指導教員、学生との三者による密接な情報共有の必要性が指摘された。また、成績評価（単位認定）の問題も課題とされていた。

今後は、保育士養成校への調査を進め、特別な配慮を必要とする学生の実態を把握するとともに、保育の特性や保育士の専門性に照らして、どのような配慮や支援が可能であるのかを検討していきたい。

Key Words：実習、発達障害、困難感、対人関係、保育者養成

1. 研究目的

「改正障害者基本法」、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」、「障害者の権利に関する条約」を踏まえ、大学・短期大学・専門学校等の高等教育機関には、障害のある学生が障害を理由とする差別を受けないように取り組むとともに、障害のある学生が、障害のない学生と平等に教育を受ける機会の確保に努めることが求められるようになった。

「障害のある学生の就学支援に関する検討会報告（第一次まとめ）」によれば、「教育上の合理的配慮等」を検討する上で対象とする活動の範囲は、「授業、課外授業、学校行事への参加等、教育に関する全ての事項」となっている。この中には、看護、福祉、保育などの対人援助職の養成課程を持つ大学等において実施される各種の実習も含まれる。

近年では、看護・福祉などの対人援助職の養成において、合理的配慮を要するレベルには至らないが、発達障

害に似通った特質がみられ、対人関係において課題のある学生に対する指導の困難さが指摘されるようになってきた。筆者ら（2019）が、保育士養成校の実習担当教員に行ったインタビュー調査では、「病気や障害・発達上の特性」として、「気分が激しく乱高下する」、「音に敏感に反応するため議論に参加するのが難しく、意見交換の音声に耐えられず、『うるさい』という」、「子どもを静かにさせようとして、子どもの口をふさぐ行為を行う」、「子どもの心情を読み取って実習日誌を書くのが難しい」という学生の姿が明らかとなった。

そこで、本研究では、今後の保育士養成校への全国調査を念頭におき、看護・福祉分野などの対人援助職における先行事例を中心として、特別な配慮を必要とする実習生の困難感や支援に関する文献の検討を行い、研究動向及び問題点を整理することを目的とした。

2. 「発達障害」学生数と支援の実態

日本学生支援機構（2019）による「大学、短期大学および高等専門学校における障害のある学生の就学支援に関する実態調査」によると、2019年5月1日現在における障害学生数は37647人（全学生数の1.17%）で増加傾向である。うち発達障害は7065人（18.8%）であり、「病弱・虚弱」（32.9%）、「精神障害」（25.8%）に次いで第

2020年12月1日受付／2021年1月21日受理

^{*1} HATTORI Shinichi

HIROSHI Yoko

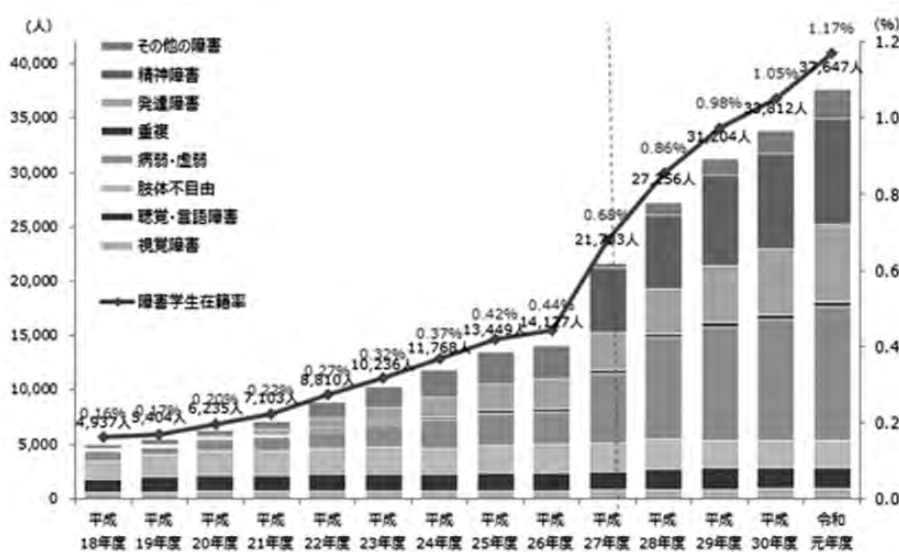
関西福祉大学 教育学部

^{*2} INOUE Hisami

大阪大谷大学

^{*3} HANDA Musubi

兵庫大学短期大学部



(図1 障害学生数と障害学生在籍率の推移)
(出所) (日本学生支援機構2020)

3位となっている(図1)。

また、発達障害のある学生または発達障害のあることが推察される学生が在籍する学校694校で行われている授業支援について、複数回答で尋ねたところ、「配慮依頼文書の配布」(67.7%)、「講義に関する配慮」(41.6%)、「学習指導」(39.9%)の順であり、「実技・実習配慮」は24.1%であった。なお、授業以外での支援については、「専門家によるカウンセリング」(77.8%)、「自己管理指導」(50.5%)、「対人関係配慮」(49.5%)が上位に挙げられていた。

3. 研究方法

1) 文献の収集方法

本研究のテーマと関連する文献について、CiNii及びハンドサーチによる文献検索を行った。その際、次の項目を条件とし、日本国内の論文を対象とした。

- ・研究の目的が、上述した本研究の趣旨に該当するもの。
- ・検索の際には、「実習」「発達障害」「学生」「困難」をキーワードとして使用した。検索期間は2001年から2020年の20年間とした。
- ・検索にヒットした文献のうち、学会発表抄録、新聞・雑誌等の記事は除外した。

残った論文のタイトルとAbstractから内容を特定し、研究目的に関連する論文に絞った。次に、論文を精読して内容を精査し、調査方法や結果の信憑性に欠ける文献を除外した結果、条件に合う文献は13件であった。これらの文献の著者名(出版年)、論文タイトル、研究方

法及び取り扱う内容を一覧にして、表1に示した。取り扱う内容については、学生の困難感、教員の困難感、支援の方法に大別し、該当しているものに○をつけた。

2) 用語の定義

本研究において、発達障害を有する者とは、日本学生支援機構(2019)の定義に従い、発達障害に関する医師の診断書がある者で、時限性学習症/限局性学習障害(SLD)、注意欠陥・多動症/注意欠陥・多動性障害(ADHD)、自閉スペクトラム症/自閉スペクトラム障害(ASD)及びこの3つのいずれかが重複している者を指すこととする。

また、本研究における「特別な配慮」とは、発達障害であるとの医師の診断書はないが、発達障害があることが推察される学生に対して、学校が行う様々な支援や教育上の配慮のことを指して用いる。

4. 特別な配慮を必要とする実習生に関する文献検討

発達障害の特性を持つ学生の姿として、「周りの空気が読めない」、「相手の気持ちに配慮できない」、「こだわりが強い」、「同時に2つのことがうまくできない」など挙げられる。このことは、実習におけるコミュニケーション、援助技術、実習記録、他者との協働・協力などの様々な場面において、様々な困難を生じることが推測される。教員もまた、そのような学生を担当した場合に、実習指導にいくつもの困難を抱えることになる。実習における発達障害の可能性のある学生への対応については、まさ

表1 特別な配慮を必要とする実習生に関する文献一覧

No	職種	著者（発行年）	論文タイトル	研究方法	取り扱う内容		
					学生の 困難感	教員の 困難感	支援の 方法
1	看護師	中尾ら（2015）	看護基礎教育における学生への発達障害支援の現状	インタビュー調査	○	○	○
2	看護師	山下ら（2015）	発達障害及び発達障害の疑いのある看護学生の臨地実習における学習困難の様相	アンケート調査	○	○	○
3	看護師	戸部（2018）	看護教員における発達障害学生に対する意識と修学支援の現状	アンケート調査		○	○
4	看護師	岸ら（2019）	発達障害および発達障害の疑いのある大学生への支援事例に関する文献検討－看護学生の支援への示唆－	文献研究	○	○	○
5	看護師	川上ら（2019）	医療者養成機関における、発達障害およびその特性のある学生支援の基本的理解	文献研究			○
6	看護師	師岡ら（2019）	発達障害またはその傾向がある看護学生に対する臨地実習上の支援の実態と教員の支援の妥当性に関する認識	アンケート調査			○
7	看護師	吉兼（2020）	看護師養成施設における看護教員の負担感について－対人関係の構築を苦手とする学生に焦点をあてて－	アンケート調査		○	
8	看護師	花村ら（2020）	大学の看護教育における発達障害の問題を考える－合理的配慮と支援の展開に向けて－	文献研究	○	○	○
9	社会福祉士	浅原ら（2008）	社会福祉現場実習を希望した発達障害学生への自己認知支援の実態－セルフ・エスティームを低下させない学内機関との連携のあり方－	事例研究	○	○	○
10	精神保健福祉士	向井ら（2017）	精神保健福祉援助実習における学生の対人関係能力に関わるスクリーニングテスト作成に関する研究～学生の発達障害に着目して～	スクリーニング テストの作成			○
11	作業療法士	佐々木ら（2010）	臨地実習における学生の困難さの分析～発達障害の観点から～	質的調査		○	
12	保育士	川端（2015）	発達障害の特性をもつ学生への保育実習及び進路選択支援の検討	事例研究	○		○
13	保育士	三澤（2017）	配慮を必要とする学生の学外実習における支援体制の課題について－幼稚園教諭・保育士を目指す発達障害学生の学ぶ環境を保障するための支援体制－	文献研究 事例研究	○	○	○

に手探りの状態が続いている。

ここでは、看護・福祉分野などの対人援助職を中心として、特別な配慮を必要とする学生の実態や対応事例についての文献を収集し、研究動向及び問題点の整理を試みた。

1）看護師

中尾ら（2015）は、看護師養成機関の教員1名（看護教員歴21年）へのインタビューを行い、主に1名の学生を対象にして印象に残るエピソードや指導困難場面、その時の対応、対応後の結果について述べている。「発達障害を理解するきっかけ」としては、実習報告会でよく名前が挙がっていたこと、ひとつのことにこだわる、新しい環境に慣れるのに時間がかかる傾向があること、他の学生を巻き込まず1人でパニックになることであった。

本人との面談を重ねつつ、母親との面談で受診を勧め

るとともに、実習先では受け持ち患者の選定を行っている。また、学内の心理カウンセラーとの連携も試みている。発達障害の特性を有する学生に対しては、看護職にこだわらず保健師としての就職も選択肢とすることや入学試験時から周囲の理解と支援が必要であると指摘している。

山下ら（2015）は、看護師養成機関で実習指導を担当した教員に対する質問紙調査を実施し、発達障害及び発達障害の疑いのある看護学生の臨地実習における学習困難の様相について報告した。調査対象は看護大学・短期大222校、専門学校728校に配布、有効回答数267部（回収率27.3%）であった。

その結果、発達障害の疑いのある学生の有無として、「現在はいないが過去に在籍していた」29%、「在籍している」47%と答えた。発達障害の診断を持つ学生は0.1%であった。

「臨地実習において教員が感じている違和感」として、

「周りの状況を見ながら実習を進められない」、「表情やしぐさなどから相手の気持ちを読み取れない」、「受け持ち患者とうまくコミュニケーションがとれない」、「グループメンバーと協力できない」、「他者への共感が難しい」、「教員や指導者の話を聞き逃すことが多い」、「記録類など全般的に整理整頓が苦手である」、「メモしたことを忘れてしまう」、「話している相手と視線が合わない」、「同じ訴えを繰り返してくる」などの項目が上位となった。臨地実習は、患者とのコミュニケーションを図りながら、個別性や状況に応じてアセスメントを行う必要があり、直接的には見えにくい患者の生活の側面を理解し、患者の立場に立って行動することが求められる。発達障害及び発達障害の疑いのある学生にとって、他者との関係を築くことや状況の変化を読み取ることが難しく、様々な学習困難を生じていると指摘した。

次に、臨地実習において著しく学習困難な事例（88校、102事例）について、KJ法を用いて整理したところ、「基礎学力とルール遵守が身についていない」、「適切な会話ができず、自己中心的に考え、患者の思いや状況が理解できない」、「周囲との人間関係形成困難」、「繰り返し指導するが指導内容が身につかない」に分類された。山下らは、問題を整理する一方で、発達障害のある学生に対する指導方法がその学生に適していない場合があり、言葉の理解の仕方や援助技術の指導など、適切な指導方法を開発する必要があると述べている。

師岡ら（2019）は、発達障害または発達障害の傾向がある学生に対する臨地実習上の支援の実態と教員の支援の妥当性に関する認識について、アンケート調査を行った。臨地実習を指導した経験のある教員759名を対象とし、157名の有効回答を得た（19.7%）。発達障害の診断を受けている学生の「指導経験あり」は40.8%であった。

支援の内容として、教員間の情報共有、指導時のコミュニケーション上の工夫など、他の学生にも行う支援は実施されやすく、妥当であると認識されていた。一方、成績評価や実習記録に対する支援は実施の程度が低く、半数近くが過剰であると認識していた。具体的には、「実習後の減点を緩やかにする」（49.7%）、「目標達成度をかき上げして評価」（49.0%）、「他の学生と異なる評価基準を用いる」（48.3%）、「記録の提出期限の延長」（43.5%）などが挙げられていた。

吉兼（2020）は、対人関係の困難な学生に焦点を当てて、看護教員の負担感について報告している。ここでいう対人関係困難学生とは、「①対象や友人との関係で実

習やグループワークに困難感がある。②実習場面で場の空気が読めない。③他者の立場を理解できない。④他者の思考を妨げる。⑤同じ空間で同じ課題を行うことに困難を生じる。」と定義している。

アンケート調査の結果、看護教員の93.2%が対人困難学生の教育を経験しており、そのほとんどは障害診断を受けていなかったと報告している。また、看護教員の精神的負担感に影響を及ぼす因子は、「臨地実習」、「技術テスト」、「保護者の情緒不安定」であった。さらには、学習環境や人的環境を整えることで、看護教員の対人困難学生に起因する負担が減少する可能性があるとは指摘している。また、看護教員にとっては、学習場面や保護者との「関係調整」が負担となっていると述べている。

戸部（2018）は、看護教員における発達障害学生に対する意識と修学支援の現状について、全国の看護教員534名に対し、アンケート調査を行った。修学支援の課題は、「修学上の困難が発達障害によるものかどうかの判断」（80.1%）、「学生の自己理解」（69.9%）、保護者の理解（66.1%）、教員の理解（67.0%）、部署間の連携（66.3%）の順であった。この結果は、修学上の様々な困難が発達障害の特性に起因するものであるかどうかの見極めは、支援の方向性に大きな影響を与えることを示唆している。

岸ら（2019）は、発達障害のある大学生への支援の現状を知り、看護教育における技術演習や臨地実習を見据えた支援についての示唆を得ることを目的とし、発達障害学生への支援事例が述べられている文献について検討を行った。

その結果、①対象者が感じている困難感、困りごとを具体化していくことを支援のきっかけとし、解決策を対象者とともに見出ししていくことができるような関わり、②支援の過程では常に対象者本人の意思を尊重し、対話の中から本人が納得するより良い方法を一緒に探していくプロセスを重視する、③対象者に合わせた自己目標を掲げ、対象者本人と支援者が共有した上で支援を行うことを提言している。

川上ら（2019）は、医療者養成機関における、発達障害およびその特性のある学生支援の基本的な考え方を示した。障害者差別解消法により、医療者養成機関においても発達障害およびその特性がある学生への合理的配慮の提供が求められている。医療者養成機関における発達障害およびその特性がある学生の「入学」、「在学中」、「就職」の面から合理的配慮の考え方と具体的な支援につい

表2 障害特性と臨地実習で体験される困りごとの例

障害特性	臨地実習で体験される困りごとの例
想像力および統合力の問題	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい環境に慣れることに時間がかかり、変化に戸惑いやすい ・実習時間何をするのか見通しを立てられない ・手順や道具の種類・置き場所など、ひとつのことにこだわる ・複数の情報（教科書、カルテ、観察内容）を統合することに苦手で、同じミスを繰り返したり、ケアとして実施したことを実習簿にまとめられなかったりする ・周りの状況をみながら実習を進められない ・患者の全体像を把握した上で看護計画を作成できない ・ストレス状況に対して黙り込む ・同じ訴えを繰り返してくる
不注意および記憶の問題	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取ることが苦手なことから生じる聞き漏れ、聴き間違い ・実習関連の書類や記録物などを忘れる、期限内に提出できない、記入漏れなどの不備がある ・メモしたことを忘れてしまう
コミュニケーション力および言語力の問題	<ul style="list-style-type: none"> ・表情やしぐさから相手の気持ちを読み取れない ・話している相手と視線が合わない ・受け持ち患者やグループメンバーとうまくコミュニケーションが図れない ・教員の話を聞いているが意味を取り違えて受け止める、字義通りに行動してしまう ・考えや想いを言葉にして表現できない、文章作成が苦手

（出所）花村ら（2020：9）

表3 臨地実習において実施されうる発達障害特性に対する支援および対応の例

キーワード	支援・対応の例
特性理解： 学生の特性や困りごとに対する学生自身や教員の理解を促す取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・個別面談や話を聞く機会をより多く設定する ・できることできないことを学生とともに整理する ・学生の希望をくみ取る ・学生の不安や落ち込みに耳を傾ける ・専門機関に受診を勧める ・学内カウンセラーにつなげる
具体化： 指示や課題、評価項目などの具体化を図り、学生による理解を促す取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・実習における評価項目を具体的に提示する ・患者や指導者の言動の意味合いを補足説明 ・患者への関わり方や記録すべき内容をより具体的に指導 ・指示や説明は短く、喩えを使わず直接的に伝える ・指示や説明や絵や図で視覚的に伝える。指導項目で教えてほしいことは紙に書いて渡す ・優先順位リストを共に作成する ・教員と指導者間で差別と危険回避を明確に区別する
余裕の確保： 社会的障壁を減らし、学生が余裕をもって実習課題に集中できる取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・技術練習の時間を追加、シミュレーションを実施 ・精神的安定を図れるスペースを準備 ・テープレコーダーや計算機、パソコンの使用などを許可 ・学生が関わりやすい患者を選定 ・同時に2つ以上の指示を出さない ・SST やロールプレイングなどの行動療法的アプローチ

（出所）花村ら（2020：10）

て概説した。発達障害およびその特性がある学生の支援においては、明確な基準の提示、教職員の連携・協働、特性のある学生との関わり方に関する研修機会の必要性を指摘している。

花村ら（2020）は、川上らと同様、大学の看護教育における発達障害の問題について、合理的配慮と支援のあり方について述べ、基本的な視点を提示している。先行研究をもとに、「発達障害特性と臨地実習で体験される困りごとの例」（表2）、「臨地実習において実施されうる発達障害特性に対する支援および対応の例」（表3）を作成している。

同じ論文の中で、花村らは、障害特性を持つ学生にどう対応するかはある程度検討されているものの、目の前

のケースをどう理解するのかというアセスメントに関する情報が乏しいことを指摘している。アセスメントの際には、学生本人と話し合いの場を持つことが重要であり、教員から見た「問題」と学生自身からみた「問題」とは異なる場合が少なくないとも述べている。

2) 社会福祉士・精神保健福祉士

浅原ら（2008）は社会福祉援助技術現場実習を体験した3年生が、障害特性による困難さに直面した事例について報告している。その際の対応から、発達障害学生への配慮すべき課題の整理と学内の関係機関との連携を含めた支援、進路選択につなげるアプローチの方向性を検討している。支援内容としては、「福祉の仕事の理解に

対する支援」,「困っている・必要な配慮を求めることへの支援」,「学内外における連携の広がり」の3点にまとめている。

1点目の「福祉の仕事の理解に対する支援」とは、大学入学前に専門的な自己認知支援を受けていない場合に、本当に専門職を目指すのかどうかを含めた進路選択の支援である。2点目は、「困っている・必要な配慮を求めることへの支援」であり、履修登録時のルールやシラバスの内容について、個別に補足説明を行い、学生の興味関心ともすり合わせて、その科目を履修すればよいかアドバイスすることである。そして、必要に応じて、受講時の心構えと事前準備の必要性、教員やクラスメートに障害表明をする必要があるか、試験・課題・授業の進め方などの配慮について、学生と担当教員間で事前に話し合う必要性を述べている。3点目の「学内外における連携の広がり」としては、視覚的にわかりやすくする工夫や抽象的概念を具体的に説明する工夫など、障害特性を踏まえた情報提供の工夫を大学や専門機関だけではなく、高校とも連携して検討することを述べている。

このように入学前の進路選択から在学中、さらには卒業後までを見据えた長いスパンでの組織的、継続的な支援が必要であることを示唆している。また、本人が主体的に配慮申請を行うことができるという視点が重要であり、入学時に障害状況を保護者や学生から申告してもらう方法を確立する必要があると指摘している。

実習に関しては、学内の実習担当教員のみが対応にあたるのではなく、学生相談室及び実習先担当者との連携を密にすること、実習のスケジュールリングをより丁寧に理解することが重要であると述べている。特に、学生相談室での面接を積み重ねる中で自己認知が進み、今の自分を受け止めながら、自分の中の混乱や動揺を受け止めることができるようになった事例を紹介している。

向井ら(2017)は、精神保健福祉援助実習が始まる前のより早い段階において、配慮を必要としている学生を発見できるように、学生の対人関係能力に関わるスクリーニングテストを作成した。テストの信頼性・妥当性の検討、実施方法の精査については今後の課題とされていた。

3) 作業療法士

佐々木ら(2010)は、発達障害の観点から臨床実習における学生の困難さの分析を試みている。臨床実習における学生の実態を指導者の評価をもとに質的に分析し

た。その結果、不合格学生には狭い活動・対人交流技能の問題、自他関係の過敏さ、感情優位の行動など、認知・メタ認知機能の問題が指摘されたと述べている。これらは、自閉症スペクトラムの特徴に重なる部分あるとして、教員の専門的支援の確立と啓発の必要性を訴えている。

4) 保育士

三澤(2017)は、配慮を必要とする学生の学外実習における支援体制の課題について検討した。学生支援職員と実習担当教員の連携、学生が主体的に相談できる窓口の設置、配慮申請後に大学生活、授業、学外実習、就職活動までの支援を継続して対応・記録する取り組みを踏まえた学外実習における配慮手続きの流れを作成している(図2)。

また、学外実習における支援体制の課題を、学生支援職員、実習担当教員、学生、実習受け入れ先の対象ごとに整理した(図3)。それぞれの課題を解決するためには、配慮を聞き取る機会と情報共有の流れを作成しておく必要があると指摘している。

川端(2015)は、発達障害の特性を持つ学生にとって、保育実習は職員や子どもとの関係で「場の空気を読む」ことを含め、コミュニケーションや立ち居振る舞いなど、彼らの苦手とするスキルを求められる場面が多く、相手の気持ちを読み取る力も駆使しなければならないと指摘した。実習での困難体験は単位認定に影響を与えるだけではなく、仕事に対する適性の問題として扱われる。

論文では、3名の学生に対する支援に基づき、実習経験を進路選択に結びつけて検討している。当初は彼らの保育実習をいかに通過させるかを中心に考えていたという。しかし、支援が進むにつれて保育実習の体験こそが、自己について深く考える機会となっていることがわかり、保育職以外の福祉的職場への就労開拓の可能性について言及している。

5. まとめと今後の課題

日本学生支援機構(2020)によれば、発達障害であるとの医師の診断書はないが、発達障害があることが推察される学生については、統計上の「発達障害学生数」には含めていない。しかし、学校における支援の実態等に鑑み、「発達障害(診断書無・配慮有)」という区分を設けており、「発達障害(診断書無・配慮有)」の支援障害学生は2854名、発達障害(診断書有)の支援障害学生4990名と合わせると全体で7844名を数える(2019



図2 学外実習における配慮手続きの流れ
(出所) 三澤 (2017: 45)

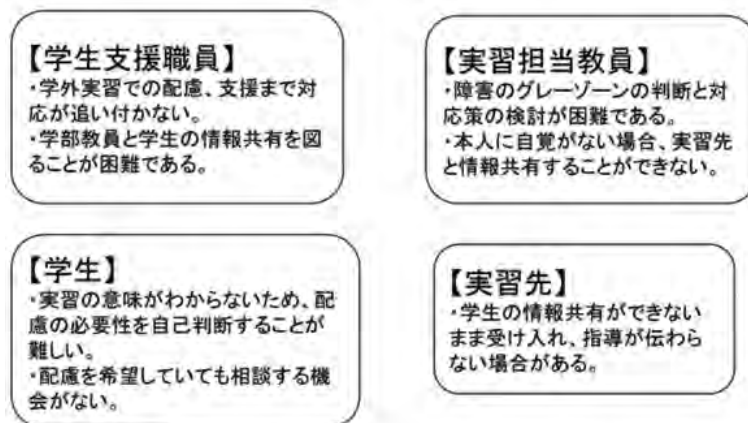


図3 学外実習における支援体制の課題
(出所) 三澤 (2017: 40) をもとに筆者が作成

年度調査)。

このように、「発達障害(診断書無・配慮有)」の増加は、多岐にわたる対応が求められるということであり、対人援助職の養成に携わる教育機関においては喫緊の課題である。

先行研究の分析からは、対象となる学生のアセスメント及び配慮申請のシステムづくり、学生相談室との連携による心理的支援、入学前から卒業後までを見通した総合的かつ継続的な支援のあり方が課題となっていた。

実習においては、実習先担当者と実習指導教員、学生との三者による密接な情報共有の必要性が指摘された。また、成績評価(単位認定)の問題も課題とされていた。

今後は、保育士養成校への調査を進め、特別な配慮を必要とする学生の実態を把握するとともに、保育の特性や保育士の専門性に照らして、どのような配慮や支援が可能であるのかを検討していきたい。

本研究は、科研費(課題番号 20K02663)の助成を受

けて実施した。

<引用文献>

- 浅原千里・上野千代子・若山 隆・柿本 誠（2008）社会福祉現場実習を希望した発達障害学生への自己認知支援の実践－セルフ・エスティームを低下させない学内機関との連携のあり方－，日本社会福祉大学社会福祉論集，119，193-207
- 花村カテリーナ・柴田早紀（2020）大学の看護教育における発達障害の問題を考える－合理的配慮と支援の展開に向けて－，関西看護医療大学紀要，12（1），3-14
- 井上寿美・服部伸一・半田 結・廣 陽子（2019）特別な配慮を必要とする保育実習生に対する指導上の困難に関する実感調査，大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要，9，15-26
- 川上ちひろ・西城卓也・恒川幸司・今福輪太郎・中村和彦（2019）医療者養成機関における，発達障害およびその特性のある学生支援の基本的理解，医学教育，50（4），337-346
- 川端奈津子（2015）発達障害の特性をもつ学生への保育実習及び進路選択支援の検討，明星大学通信制大学院紀要，15，23-25
- 岸 央子・古田雅俊（2019）発達障害および発達障害の疑いのある大学生への支援事例に関する文献検討－看護学生の支援への示唆－，中京学院大学看護学部紀要，9（1），13-22
- 三澤 恵（2017）配慮を必要とする学生の学外実習における支援体制の課題について－幼稚園教諭・保育士を目指す発達障害学生の学ぶ環境を保障するための支援体制－，梅光学院大学論集，50，37-47
- 師岡友紀・望月直人・荒尾晴恵（2019）発達障害またはその傾向がある看護学生に対する臨地実習上の支援の実態と教員の支援の妥当性に関する認識，大阪大学看護学雑誌，25（1），81-88
- 向井智之・久米知代・安藤知行・川池秀明（2017），精神保健福祉援助実習における学生の対人関係能力に関わるスクリーニングテスト作成に関する研究～学生の発達障害に着目して～，聖徳大学・聖徳大学短期大学部実践，2，1-5
- 日本学生支援機構（2019）大学，短期大学および高等専門学校における障害のある学生の就学支援に関する実態調査
https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/index.html（2020年11月10日アクセス）
- 日本学生支援機構（2020）大学，短期大学および高等専門学校における障害のある学生の就学支援に関する実態調査結果報告書，68
- 中尾幹子・田中千寿子・豊島めぐみ（2015）看護基礎教育にお

ける学生への発達障害支援の現状，大阪信愛女学院短期大学紀要，49，15-25

- 佐々木祐子・八田達夫（2010）臨地実習における学生の困難さの分析～発達障害の観点から～，作業療法教育研究，10（1），15-22
- 障がいのある学生の修学支援に関する検討会 報告（第一次まとめ）
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/12/_icsFiles/afiel_dfile/2012/12/26/1329295_2_1_1.pdf（2020年11月10日アクセス）
- 戸部郁代（2018）看護教員における発達障害学生に対する意識と修学支援の現状，発達障害研究，40（2），165-174
- 山下知子・徳本弘子（2015）発達障害及び発達障害の疑いのある看護学生の臨地実習における学習困難の様相，埼玉医科大学看護学科紀要，9（1），11-17
- 吉兼伸子（2020）看護師養成施設における看護教員の負担感について－対人関係の構築を苦手とする学生に焦点をあてて－，山口県立大学看護栄養学部紀要，13，37-47